

## 十字架上の救い

丸山 勉

### [聖書] ルカによる福音書 23章 26～43節

人々はイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというキレネ人を捕まえて、十字架を背負わせ、イエスの後ろから運ばせた。民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエスに従った。イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。人々が、『子を産めない女、産んだことのない胎、乳を飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来る。そのとき、人々は山に向かっては、『我々の上に崩れ落ちてくれ』と言い、丘に向かっては、『我々を覆ってくれ』と言い始める。『生の木』さえこうされるのなら、『枯れた木』はいったいどうなるのだろうか。」

ほかに、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。[そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。】人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。民衆は立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」そして、「イエスよ、あなたの御国においてになるときには、わたしを思い出してください」と言った。するとイエスは、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

### [序] 受難週の始まり

丁度今日から「聖週間」とも呼ばれる、主イエス・キリストのご受難を心に刻む「受難週」に入ります。心に刻むということは、新たにイエス様と出会うために御言葉に触れ、「黙想」するということだと思えます。

私はクリスチャンになって、まだ年数も浅い若い頃、ある信仰の先達から、「聖書と言うのは、頭で読むものではありません。聖書とは物語なのです。真理とは、解説ではなく、“物語られる”ものなのです。この聖書に書かれている物語を、自

分へと物語られていることとして受け止めることが大事です」と言われたことがあります。それはそれ以来、聖書の一字一句が分かるとか分からないとか、そういう次元ではなく、聖書そのものと向き合う姿勢を作ってくれたように思います。ですから、私はあまり解説的な話をするというのではなく、と一緒に、聖書が私たちに告げている物語に「聴いて」行きたいと思うのです。それは特に、この主の受難週の時には大切なのではないかと、思います。

### [1] 「血しおしたたる」の讚美歌

今日、この後でぜひ一緒に歌いたいと思った賛美歌は「**血しおしたたる主のみかしら**」です。今日の礼拝はある意味、この讚美歌と一緒に心から歌えたら、それで十分ではないかとさえ思います。この歌は、受難週には必ずと言ってもよいほど歌う讚美歌だと思いますが、十字架の上の主イエス様に対する、私たちの信仰告白そのものだと思います。決して明るい歌ではありませんけれども、歌えば歌うほど、深い、信仰の喜びと慰めが心の中に広がってくる賛美歌です。あの J・S・バッハも、『**マタイ受難曲**』の中で、繰返し繰返し合唱に歌わせています。受難曲の中で合唱が歌うということは、**信仰者の群れ、つまり教会が歌っている**ということであって、それは他ならない、主イエス様の前に、心の中で**ぬかずきながら歌っている**歌なのです。ドイツの**パウル・ゲルハルト**という著名な讚美歌作者による詞です。

第一節はこうです。

**「血しおしたたる 主のみかしら とげにさされし 主のみかしら**

**悩みとはじに やつれし主を われはかしこみ きみとあおぐ」。**

—「われはかしこみ、きみとあおぐ」と歌っています。十字架上のイエス様こそ、わが君だ、わが主だ、と告白して歌っています。私たちも、心からこの歌詞を、ああ、自分の心と同じだ、とと一緒に歌えたらと思うのです。

ご存知のように**福音書**は4つあって、それぞれがこの主イエス様の受難の「物語」を告げているのですけれども、その**マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書**の作者（作者たち）は、それぞれの筆で、このイエスという方の最後を描いています。そして、それは、**私たちに「態度決定」を促す**ものです。「あなたはこのイエス・キリストの受難の出来事に傍観的であってはなりません。この方を「主」と信じ仰ぐのか、それともその前を通り過ぎてしまうのか、あなたはどちらなのか」と迫ってくるものだと思います。

### [2] 主イエスの死の物語をめぐる多種多様な人々

今日のルカ福音書の箇所を見てゆきたいと思います。ここに登場してくる人物たちは、多種多様です。イエス様の他には、まず、26 節、**シモン**というキレネ人が出てきます。それから、27 節、**民衆と嘆き悲しむ婦人**たちが群れをなして、イエス様の

後について行っています。また 32 節、イエス様と共に処刑されるために二人の**犯罪人**も引かれて行っています。33 節ではついにイエス様はこの二人と共に十字架につけられました。そして 34 節、その十字架のもとでは、剥ぎ取られたイエス様の衣を人々がぐじ引きしています。35 節、それを**民衆**はたって眺め、**議員**たちはイエス様をあざ笑っています。更に 36 節では**兵士**たちもイエス様を侮辱しています。その後、ルカは地面の上ではなく、**十字架の上の三人**のやり取りを描写しています。

ここにあるのは、**一人の男の死の物語**であります。しかも、今、私たちはイエス様の死を、自己犠牲の死、私たちへの愛ゆえの死、とある意味美しく捉えることができるかもしれませんが、この時、そのようなことを思う者は誰もおらず、そこにあったのは、一人の男の、ひと時民衆の心を掴んだ「良き人」の、あまりに惨めな、あまりに無力な、最後の姿でありました。今日の箇所だけを見ても、イエス様に対しては、「あざ笑い」(35 節)があり、「侮辱」(36 節)があり、「ののしり」(39 節)がありました。また、今日の箇所のすぐ前を見ますと、たとえば、21 節や 23 節を見ますと、主に対する、人々の狂気に満ちた叫びの声を聞こえてきます。それは「**十字架につけろ、十字架につけろ**」という群衆の声です。

何ということでしょうか…。これは、言葉は悪いですが、「**殺人ショー**」です。「**公開処刑**」です。読んでいて、全く気持ちが安らぎません。まことに酷い話なのです。

ある、**力ある者たちの策略や自己保身が、目障りな存在を抹殺**しているわけです。そしてまた、**無責任なやじ馬的な人々**は、いとも簡単にその中に知らないうちに取り込まれています。いや、もっと言えば群衆たちも、暇つぶしのようにこの光景を見て興奮していたのかもしれませんが…。そして、思うのです。これはこの時、この二千年前の、遠いエルサレム郊外の出来事だけだとは言えないのではないかと。

今、世界は、或いは社会は、あっけないほど、**憎悪の心がエスカレート**してはいないでしょうか？ **むき出しのヘイトスピーチ**がまかり通っていないでしょうか？ ひよっとしたら、それを権力を持つ者たちが許容して利用していないでしょうか？ 外国人だけではなく、人間同士が「支配—被支配の関係」に、いとも簡単になっていないでしょうか？ 会社、社会、学校での**パワー・ハラスメント、セクシャル・ハラスメント、障がい者差別、LGBT への差別**、また**幼い子供へのこともあろうに親からの暴力**、また、選挙で民意が示されても聞く耳を持たずとしない、病んだ差別が**沖繩を舞台に起こっています**。これらは一体何なのでしょう？——本当に聞くべき声に耳をふさぎ、本当に見つめるべきものを見ようとしていないのではないかと、聖書は私たちに問いかけているように思うのです。

このような人間の心と、**神の子を十字架へと押しやる心**というのは、私は同心円を描いていると思います。これは、**他人事ではない**と思います。私たちも、私もまた、キリストに「**十字架につけよ**」と叫ぶ者なのです。イエス・キリストは、「**神の言葉**」そのも

ののお方です。この方を抹殺しようとすることは、神のことばを封じ込み、己を神にすることと等しいこと。それは、誰かをどこかで支配しながら自分を保つような生き方、それ故結局は、自らを滅ぼすような生き方になってはいないでしょうか？

ですからイエス様は、人間に対して、私のために嘆かなくてよい、**自分の罪深さが分らない自分とその子孫のためにこそ嘆け**、と言われたのだと思うのです。

讚美歌「血しおしたたる」の第二節ではこのように歌われています。

「主のくるしみは わがためなり われは死ぬべき つみびとなり  
かかるわが身に かわりましし 主のみこころは いとかしこし」

### [3] キレネ人シモンと私たち

この物語で、二人の人物が特に印象的です。一人はキレネ人シモン、もうひとり**は十字架上の犯罪人**です。キレネ人シモン、彼は、イエスに代わって、十字架の横木を担がされた人物です。ローマの慣習では、十字架刑を宣告された者は、自らその横木を刑場まで運ぶことになっていたということです。ですから、イエス様も、初めは太い荒削りの木を担ぎ、**されこうべ(別名ゴルゴタ)と呼ばれる丘の上まで歩かされたのだ**と思います。

けれどもイエス様はもう酷いむち打ちで憔悴しきっていたのでしょう、マタイ福音書を見ますと、兵士たちは誰か別の者に担がせようと、このキレネ人シモンに**無理やりに押し付けた**ようです。ここにも権力者の差別が見て取れます。彼シモンは、アフリカのリビア砂漠のほとりのキレネ出身の者で、**黒人であった**と思われるから、ローマ兵からみれば有無を言わず強制したのだと思います。

シモンは、聖書の表現を見ると、**イエス様の後ろをついていく形**になりました。聖書はあまり詳しくそのことを描写していませんが、これは、私たち信仰者の姿を表しているのではないのでしょうか？ イエス様はある時、おっしゃいました。「わたしについてきたい者は、日々、自分の十字架を背負ってわたしに従いなさい」(ルカ 9:23)と。私たちが罪の贖いの十字架にかかることを言っているのではありません。それをして下さるのは神の独り子イエス様です。人間には、人々の罪を背負って死ぬなどということは出来ないのです。けれども、**私たちも、イエス様のお苦しみのほんのわずかな一部分でも担うようにされる**のではないのでしょうか。

私たちの日常生活の様々な苦しみ、また、突然訪れる試練や悲しみ、それらは根本的に全部イエス様がご自分の両肩に背負っていて下さっています。しかし、神様は、私たちが御国に迎えられるまで、私たちが耐えられる範囲で、「あなた固有の十字架を背負っておいで」と言っておられるのではないかと、思います。このシモンも十字架で殺されたわけではありません。けれど、そのイエス様のお苦しみを少し分けてもらった。それが信仰の歩みなのではないのでしょうか。そして、私たちがイ

イエスの前を歩くのではありません。このお方が、前を進み、道を作って下さっているのです。ただこのお方に従って行けば良い。そのように、生涯を通して主に従って行く中で、私たちは十字架の愛に応えていくのだと思います。このシモンは、マルコ福音書では、「アレクサンドロとルフォスとの父（であるシモン）」であるとも語られています。教会で名が知られているのです。つまり、教会の群れの一員、キリスト者になったのです。このゴルゴタの丘から、彼の人生は全く変えられたのです。

讚美歌「血しおしたたる」の第三節ではこのように歌われています。

「なつかしき主よ はかり知れぬ 十字架の愛に いかに応えん  
この身とたまを とこしえまで わが主のものと なさせたまえ」

#### [4] 十字架上の犯罪人と私たち

そして最後は、ひとりの十字架上の犯罪人です。イエスを挟んで、二人の犯罪人が十字架についています。みせしめになり、やがて確実に死がやってくる断末魔にあります。その自分の隣にイエス様がいる。そこでも、一人の犯罪人は「おまえはメシアではないか、自分自身と我々を救ってみろ」と、まるで地上の兵士たちのようにののしります。けれどもよく読んでみますと、イエス様はこの者に対して叱責していません。私は、イエス様はこの者の不信仰も、悲しみもじっと受け止めておられたのではないかと、思いました。

ただ、驚くべきことは、もう一人の犯罪人の口から出た言葉です。41 節。「我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」なぜそのようなことが言えたのでしょうか？ 死を前にして謙虚になったと言うだけではないと思います。恐らく、ルカ 23 章 34 節に記されているイエス様の祈りの言葉に打たれたのではないかと想像します。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」この言葉に、これまで経験したことのない、愚かな愛、とてつもない愛を感じたのではないかと。それで、彼はイエス様に対して、言える精一杯のことを言いました。——「イエスよ、あなたの御国においてになるときには、わたしを思い出してください」と言った。」

彼は「救ってくれ」とも言えなかった。ただ、ああ、こんな男がいたなど、心の端に引っ掛けてくれればそれで十分ですと言ったのです。…そして、イエス様にはそのひと言で十分だったのです。主は、主に向かってくる者を、決して拒むことはないのです！ 私たちが出来ること、それはイエス様に相応しい立派な人間になって、それで救って下さいということではありませんよね。そうではなく、ボロボロの罪人のまま、弱いまま、それを隠さずにイエス様に飛び込んでいくことではないでしょうか。その時、主は私たちにも、例外なく言って下さるのです。

「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる！」

やがてではなく、「今日」。なぜかと言えば、イエス様が今、共におられるから。  
ある方が言いました。「イエス様がおられるならば、そこがたとえ地獄であってもそこは楽園だ」と。私も本当にそうだと思います。

#### [結] 私たちの「生と死」の物語

イエス様の十字架の物語、それは私たちの「生と死」の物語でもあります。週報にもお書きしたのですが、ヘンリ・ナウエンの言葉も是非味わってください。私たちは、主イエスの死によって、私たちを脅かそうとするあらゆる死の力から解放されて、真にいのちを生きる者、神の子どもとされているのです。それはすべて、主が、神ご自身と等しいお方が、神のみくらを降られ、へりくだり、人間の想像を超えて、十字架の死に至るまで、従順に神様のみ心を成し遂げる歩みをして下さったからであります。

讃美歌「血しおしたたる」の第四節の歌詞をお読みしてお祈り致します。  
「主よ、主のもとに かえる日まで 十字架のかげに 立たせたまえ  
み顔をあおぎ み手によらば いまわのいきも 安けくあらん」

お祈りをお捧げ致します。